

家庭環境における子育ての実態調査(No.1)

伊達 萬里子

(武庫川女子大学文学部教育学科体育専攻)

An Investigation into the Actual Condition of Child Care to the Family Environment(No.1)

Mariko Date

Department of Physical Education, Faculty of Letters,

Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan

Bringing up children is an activity shared by parents. During this time parents and children grow and develop together. However in reality arbahization has advanced deterioration of solidality. And changes of social enviloment has forced the family to function fully for child care. The number of nuclear families have increased and decrease of children has become burdensome for unexpoarenced parents. The anxiety and stress of child care has increased parents worries. They intend to consult with someone on some matters for solution and the to deal with them.

緒 言

子供を育てると言うことは、両親が共有しあう創造的な活動であると共に、親と子が育ち合いながら成長する営みであると考えられる。

子育ての方法や知識に関して、昔は大家族の中で、或は子育て経験者である隣近所の人々とのかかわりの中で共有しながら伝承されて来たものである。ところが今日の社会では、急激な都市化が進み地域社会での連帯感の希薄化等、社会環境の変化により団塊族といわれる家族がすべての子育て機能を担わなければならなくなって来た。その家族も核家族化が進み、少子化で経験の浅い親にとって、育児は大きな負担となっており、これに対する不安やストレスが高まり、悩みを持つ親の増加をもたらしている。その結果、子育てについての具体的、実証的な情報を求めているのが現状であろう。

ところで不安やストレスを増大させる因子としては、マスコミによる過剰刺激、退廃的なテレビ番組、マンガやゲーム、おもちゃの氾濫、食生活におけるインスタントやレトルト食品、清涼飲料水、食品添加物、住生活における遊び場の減少、大気汚染、騒音、日照問題、水質汚染、交通機関の発達による事故、薬公害等の生活環境の悪化があげられる。これらはどれを取っても子供の心と体を蝕むものである。子育ては子供の発育発達過程に即して適切な時期に適切な方法で親が関わり、健やかな子供の成長を図るものである。ここにおいて世の親たち、その中でも特に子育てに関わりの深い母親はどのように対処しているのだろうかということに関心を持ち、今回この子育てに主として関わっている母親を対象として家庭状況、目的意識等についてアンケート調査を実施し、比較考察を試みた。

研究方法

1. 調査期間 平成4年10月～12月
2. 調査対象 兵庫県主催子育て実践研究講座に参加した姫路市在住の1～3才児を持つ母親全員42名(回収率

(伊 達)

75%)

3. 調査内容 質問紙法によるアンケート調査を実施し、記述統計により分析した結果を考察した。ここでは分析軸として家族構成及び子育てに関する問題意識に視点を据える。
有意差の検定に関しては X^2 検定を用いた。

結果と考察

1. 年齢と体位の概要

講座参加者の子供に対して身長と体重を測定し、結果を Table 1. に示した。

Table 1. Comparative study of Height and Weight

	項目	N	Max	Min	M	SD	r
1歳	身長	14	80	65	74.4	3.03	r=1.29
	体重	14	12	8.5	9.9	3.03	1%有意水準
2歳	身長	15	91	80	84.8	3.75	r=0.91
	体重	15	14.5	10	11.6	3.75	1%有意水準
3歳	身長	13	99	90	94.0	3.94	r=0.79
	体重	13	16	10	14.1	3.94	1%有意水準

測定した結果、1～3歳児共に1%水準の相関が認められた。全国の平均値とはほぼ同じデータであった。

2. 兄弟の有無(1～3歳の子供対象)

Table 2. Have some Brothers and Sisters or not

	無し	有り	有意差
N(42)	20	22	X^2 検定
1歳児	10	4	$X^2=2.57$ 有意差なし
2歳児	8	7	$X^2=0.07$ 有意差なし
3歳児	2	11	$X^2=6.23$ 5%で有意差あり

兄弟の有無を調査した結果、3歳児に5%の有意差が認められた。1歳児と2歳児では有意差が認められなかった。これに関して考えられることは、子供の数は、1人か2人で良いと考えているのか、又は子供が第1子であれば妊娠期間、育児期間等の家族計画に関して出産を考慮しているからではなからうか。一般的に年子の子育ては大きな負担となり得るからである。

3. 兄弟の有無(両親対象)

Table 3. Number of Parents' Brothers and Sisters

項目	0	1	2	3	4	有意差検定
N	6	12	39	22	5	(兄弟の有無で分類)
父	1	8	16	13	4	$X^2=38.09$ 1%の有意差あり
母	5	4	23	9	1	$X^2=24.39$ 1%の有意差あり

母親と父親の兄弟数を比較し、Table 3. に示したどちらも1%の有意差が認められた。

子供と両親の有無についてクロス集計を実施した結果、父親と子供が $X^2=55.71$ 母親と子供が $X^2=12.80$ となり、それぞれ1%の有意差が認められた。

この結果に対して考えられることは最近の傾向として家族構成員数が減少し、一

人っ子が増加していることと一致している点である。

家庭環境における子育ての実態調査 (No.1)

4 両親の年齢構成

Table 4. Age of Parents

項目	N	Max	Min	M	SD
父	42	42	24	33.8	31.52
母	42	38	25	30.7	24.73

平均年齢は父親が母親より3歳高い数値であった。昭和40年代の世論調査と比較して、結婚・出産年齢が高齢化の傾向を示しているように思われる。

5. 両親の職業

父親では90%の割合で会社員、5%で自営業、5%その他であった。母親に関しては専業主婦が95%と高い数値を示し、パート3%、フルタイムで仕事をもっている割合は2%の回答であった。母親がこうした講座に昼間定期的に出席出来るのは時間的に余裕のある主婦でなければなかなか難しいのではなからうか。

6. 住宅状況と住宅環境

Table 5. The Housing Conditions

	商業	工業	住宅	郊外	その他	N
個別住宅			16	6	3	25
集合住宅(低層)			4		1	5
“(中層)”	1		7			8
“(高層)”	2		2			4
N	3	0	29	6	4	42

集計した結果をTable 5.に示したように一戸建て住宅が60%、集合住宅(低層)11%、(中層)19%、(高層)10%であった。地域別で見ると住宅地域69%、郊外14%、商業地域7%、その他10%という結果になった。この傾向は今回の講座会場である兵庫県立子供の館が姫路市の郊外に位置するための数値ではなからうか。

会場までの所要時間の比較的短い周辺の受講者が多いのか、住宅地域や郊外に集中している。また、公共の交通の便が悪いため受講者は全員自家用車を使用していた事も関係があるかもしれない。

7 祖父母の同居について

同居ありの回答が40%、無しが57%、無回答3%であった。この結果により半数以上が核家族という現状である。同居に関して良い面、悪い面があり、良い面として育児について相談が出来る、悪い面では、育児方法で意見のくい違いがあったり、甘やかして困るとした回答があった。

8. 父親の育児参加について

父親が普段子育てに参加しているかという質問に対してTable 6.に示した。

Table 6. Take Part in Child Care of Father

	29歳以下	30~34	35~39	40歳以上	N
する	3	12	10	0	25
しない	0	1	0	0	1
時々	1	8	5	2	16
N	4	21	15	2	42

d.f.=6 $X^2=13.03$ 5%の有意差あり

子育てに参加するという回答が60%で、時々すると合わせると98%の非常に高い数値となった。30代後半グループでは100%である。父親不在の風潮の中で、この結果はニューファミリーという現代の夫婦像の現れではなからうか。核家族化により子育てにおける父親の役割が分明化され、母親に対する支援が大きな意味をもっているのである。但しTable 8.の質問事項である子育てについての相談相手は誰かという事に関しては、父親と回答した数値

は2%と非常に低いのが気掛かりである。精神的に母親の力にはならず、単なる肉体的な手助けにとどまっているような結果であった。

9. 育児参考書の数について

Table 7. Number of the Book on Child Care

	0	1	2	3	4冊～	N
1歳児	2	5	4	2	1	14
2歳児	0	2	9	2	2	15
3歳児	0	2	5	2	4	13
N	2	9	18	6	7	42

子育てをするうえでの参考書となる本を持っているかという質問に対して回答を求めた結果を Table 7. に示す。1冊も持っていないという回答が5%、95%の母親が1冊以上持っており、3冊以上で31%という結果であった。問題解決の糸口を探ろうとしている心理状態が伺えるようである。

10. 子育てに対する相談相手の有無と自信の有無

Table 8. Consultation and Confidence of Child Care

	有り	無し	普通	N
相談相手有り	2	7	28	37
〃 無し	0	2	3	5
N	2	9	31	42

d.f.=2 $X^2=1.19$ 有意差なし

言えない74%であった。95%の母親が何らかの疑問や不安を持ち、試行錯誤しながら子育てにかかわっているのが現状である。

Table 8. に示したクロス集計の結果、子育ての諸問題に関して相談相手有りの回答が83%であった。その相手は誰かという質問に対して、友人52%、実母21%、兄弟12%、両親10%、祖父母10%、祖母7%、夫2%という数値になった。また、子育てに自信を持っているかという質問に関して、有り5%、無し21%、どちらとも

Table 9. An Awareness of the Issues on Child Care

質問事項	人数	%	質問事項	人数	%
疲れる	17	40.5	知識不足	2	4.8
いらいらする	15	35.7	自信がなくなった	1	2.4
視野の狭まりを感じる	14	33.3	子育てが負担になる	1	2.4
やりたいことが出来ない	14	33.3	疎外感を感じる	1	2.4
子供が煩わしい	11	26.2	ノイローゼ	1	2.4
焦りを感じる	4	9.5			
子育てで自分も成長した	23	54.8	子供が生きがい	7	16.7
充実感がある	10	23.8	子育ては楽しい	4	9.5
こどもは自分の一部	10	23.8	おもしろい	1	2.4

(重複回答)

Table 10. Start of Attend the Child Care Lecture

項 目	人数	%
同じ年頃の子供と会わせたい	29	69.0
新しい発見をしたい	20	47.6
外に出ることでストレス解消したい	14	33.3
他の母親がどのようにしているか知りたい	12	28.6
子育ての反省をしたい	9	21.4
話相手が欲しい	7	16.6
その他	6	14.3

(重複回答)

家庭環境における子育ての実態調査 (No.1)

11. 子育てに関して日頃感じていること

Table 9.の結果から、子育てに追われ母親自身の自由にできる時間が制約されるため、各種のストレスが溜まり不安定な精神状態であることがわかる。又一方では子供によって新しい喜びを発見し、母親自身が精神的に成長出来たと回答している。

12. 講座を受講するきっかけ

今回、子育て実践講座を受講するきっかけについて回答を求めた結果を Table 10. に示す。

少子化により、近所に同じ年頃の子供がいないということから、同年代の子供と集団の中で接する場を経験させてやりたいという回答が多く、70% 近い数値であった。又新しい発見をしたいが48%、他の母親がどのようにしているか知りたい29%、子育ての反省がしたいが21%等、育児に対する熱心さが伺える。次に核家族で家事と育児に追われストレスが溜まるため、解消する機会として外に出ること33%、他の母親とおしゃべり等で気分転換をはかりたいとする回答が17%であった。

全体的に子育ての迷いや悩み、イライラ、不十分さを相談することや話を聞くことにより、子育てに関する自信や余裕をもってかかわりたいと望んでいる。

ま と め

核家族化、少子化、地域の連帯感の希薄化等により子育てに不安を持つ母親が多くなって来ている。一生懸命子育てをしているものの、一方ではこれではだめだという思いがあり自分のやり方に肯定感と否定感が入り交じった心理的葛藤があり、これが子育てのあるべき姿を自分の中に確定出来ず、揺れ動く現在の母親像を象徴している。こうした母親に対して子供への見方やかかわり方を共に考える場を提供し、子育てを見直しつつ、意識を深めて行くという社会の体制が不可欠であり、親子共に成長していくひたむきな生への模索を支える家族の心遣いが大切である。

文 献

- 1) 伊達萬里子, 子育て実践講座研究集録, 兵庫県立こどもの館幼児教育センター, pp.10-36(1992) -
- 2) 城谷正雄, 乳幼児のからだづくり, 青木書店, pp.4-32(1979)
- 3) 大段員美, 水谷英三, 幼児教育法講座「健康」, pp.6-17(1983)